

金沢水と歴史 －友禪と水－

加賀友禪作家 久恒俊治

1. はじめに

金沢には、二つの川があり、大きい川「犀川」を「男川」、小さい川「浅野川」を「女川」と呼び親しまれ、今でも友禪流しをしています。

川の流れるように友禪模様も時代により変化し女性の目を引いています。しかし、染色方法は、江戸時代とあまり変わらず、子弟関係の中でつくられ、テキストが残っているわけでもなく、口伝えとでも言いましょうか、師の仕事を見聞きして伝わっています。

私が見聞きした昔の話や、現代加賀友禪についてお話しさせていただけたらと思います。

2. 加賀友禪の歴史

加賀の地は外様の筆頭であった前田家百万国の城下で、北陸文化の中心として栄えてまいりました。加賀藩前田家は、代々工芸技術の振興には意を用い、九谷焼・加賀象嵌・漆器などに優れた工芸技術の伝統を残しております。染色においても、15・16世紀頃から、梅染、黒梅染が行われ、兼房染、色絵染、加賀紋、赤根染などがあって、地元ではそれらをお国染と称し、他国では加賀染といいならわされて、もてはやされていました。これまでの友禪研究では、加賀友禪は宮崎友禪齋が京都から伝えたとされてきましたが、最近、享保初期の加賀藩御用紺屋棟取・太郎屋興右衛門作の加賀染絵観音尊像31幅の掛け軸が徳島県の正副寺で発見されたことから、友禪染に先行して加賀染の技法が確立されていたことが明らかになり、その技法、完成度から、逆に加賀染めが京に伝わったともいわれております。

3. 加賀友禪の染色方法と友禪流し

友禪染めの技法は、略述すると裂き地を張って図案を元に青花（露草の汁）で下絵を描き、模様の輪画線へ防染のための餅米を主体とした糊を置きます。糊おきをした上へ、染料や顔料を用いて刷毛で色さしを加えていきます。色を塗るのですから濃淡も思いのままにぼかしがききますし、どんな色でも差すことができます。ここまでを、私たち友禪作家の手仕事で行っております。その後染め屋さんに出し、蒸気で蒸すことによって色を定着させた後、その上に厚く伏せ糊をおいてこれを完全におおっておいて、上から一面に地色を刷毛で引いて、地塗りをします。そして最後にこれを流水で水洗すると、伏せ糊も、糸目糊も流れて輪画に白い糸目の線を残した多彩な絵模様が現れてきます。これが、風情ある友禪流しとして江戸時代から行われてきた工程です。金沢の川は流速や川底の状態が友禪流しには非常に向いていたようです。近年、多くの染めやさんが工場団地に移転して、工場内の水路で水洗を行っていますが、今も、川底、水質の状態が良いときには犀川、浅野川でこの光景を見ることができます。

加賀友禪の絵柄は花鳥風月を題材とし、金糸銀糸使わないところが大きな特徴です。豊かな自然に恵まれた加賀の地の友禪染らしい絵柄です。上加工をしないわけですから染めの失敗は許されません。加賀友禪では、これらの作業を型枠などを使わず、江戸時代から変わらぬ手作業で一枚一枚を染め上げています。ですから、同じ図案を用いても、一着一着その風合いが異なるわけです。また、手作業ですから大量生産はできず、生産量は限られています。これらが、かえって、加賀友禪としてお客様に喜ばれているようでございます。

4. 現代加賀友禪

現代加賀友禪といいましても、前述しましたように技法は全く昔通りです。ただ、染料として昔は鉱物性の顔料を用いており、定着は豆汁でなされていましたが、今は化学染料を用い、加賀5彩として有名なえんじ、紫、緑、藍、黒の5色を基調として色付けを行っています。

友禪は、古くから完全な徒弟制度で受け継がれており、今も変わらぬシステムが継承されています。師匠に弟子入りして師の手仕事を見聞きし、最低8年（通常は12、13年）のきびしい修行を終えたものだけが、独立して弟子をとることができます。現在、私のところには5人の弟子がおります。

5. 木の友禪

木の友禪は、友禪のすばらしい技法を他の方面に生かせないものかと考え、最近私が開発いたしましたものです。木にそのまま友禪染を施しても友禪流しを行うことができません。そこで、洗わずに取り除くことができる糊を開発し、花器や灯籠、屏風などに友禪の絵柄を染め上げる、木の友禪を完成いたしました。

6. おわりに

金沢は、江戸時代の伝統産業が継承され、今も生活の中に根付いている数少ない地域です。一方で、新しいものの吸収も早く、ハイテク産業も早くから導入されていますし、新しい娯楽・ファッション等の導入も都会に遅れていません。これらが、二つの川に挟まれ、豊かな自然に恵まれた北陸の地に形成された、この町の個性であると思います。伝統産業の継承と、その発展のために少しでも貢献できればと願っています。